



edited by dr. masato mugitani  
vol.5-no.10

## 石田天海のカード奇術（2）

麦谷真里

(まえがき)前号に引き続いて天海のカード奇術を扱います。「天海の講習ノート」とのギャップは前回詳述しましたので割愛します。ところで、大矢定義さん(故人)は非常に几帳面というか筆まめな方で、「カード奇術の技法について」という「講習ノート」と同じように手書きで書かれたものをコピーして製本したものもあります(写真871)。おそらく、天海からカード奇術を習っているうちに、紹介された技法をまとめたものと思われる。



写真871

いまとなつては、標準的な技法の数々ですが、この当時、このようにカード奇術の技法を整理した本は日本にはありませんでしたから、当時は相当に貴重なものだったと思われます。

ところで、石田天海の「奇術五十年」に書いてあることで、ずっと私(麦谷)の心に引っ掛かっていたことがいくつかあります。その最大のものは、カーディニーとの、俗に言う、「奇術合戦」のことです。石田天海自身の「奇術五十年」の記述は淡々としていて、引用すると次の通りです。

『記者と、SAM の代表者との立ち会いで、決着をつけようということになった。その時、別々な劇場で互いに技を競った結果、彼(注・カーディニー)より私(注:天海)のほうが二年も早くニューヨークのステージに出ていたため、私の勝利に終わった。つまり私が先輩というわけである。ボールの奇術は、私のほうがうまく、タバコは互角の判定が下った。そこで私がタバコを引っ込め、彼がボールの奇術をやめることで話がついた。』

この記述を元に、以後の多くの日本の奇術愛好家が「天海がカーディニーと奇術合戦して勝った」と書いています。勝負とか試合なら、ルールとか判断基準とか、審査員の顔振れとか、いつどこでどのような仕様・段取りで行なったのか、そういう紹介があるのが普通ですが、そういう詳細については一切書いてないのでわかりません。

このできごとの具体的な年月日の記述もありませんので、いつごろのことだったのかピンポイントで期日の特定はできませんが、「奇術五十年」の巻末年表によると、1932年～1935年の間のニューヨークでのできごとだと推測できます。天海はメモ魔ですし、この「記者」は芸能雑誌「ビルボード」の記者ですから、名前くらいメモしてありそうなものです。また、通常なら、SAM の代表者ならその名前と肩書(SAM での肩書)くらいは書いてありそうなものですが、いずれも記載はありません。「奇術五十年」には、この後で、これが評判になって仕事が増えたとも書いてありますので、少なくともニューヨークのショー・ビジネスの世界ではかなり有名なできごとだったと思われるます。カーディニーと天海との奇術合戦なら、奇術マニアでなくとも興味深いエピソードで、またマスコミにも面白い題材だったと思われるますから、どこかにエピソードが残ってないか調べてみました。自分では調べ切れなかったので、こういう手品歴史分野に造詣の深い松山光伸氏にも調べてもらいました。その結果、天海とカーディニーの奇術合戦のエピソードは、一般の新聞や芸能誌どころか、肝心の SAM の機関誌である“MUM”にも見当たりませんでした。また、当時すでに刊行されていた奇術専門誌“THE SPHINX”にも掲載はありませんでした。これは面妖です。

加えて、最終的に、天海がタバコの奇術を止めて、カーディニーがボールの奇術を止めた、と書いてあります。職業奇術師としてはたいへんな「取り決め」です。アメリカ合衆国のことですから、これが口約束であるはずはなく、そのことを文書で取り交わして、双方の署名があるはずで、また、違約した場合のことも書かれているはずで、マジシャン同士のこの種の合意文書は珍しく、カーディニーも天海も物故者となつたいま、オークションの ephemera のカテゴリーで出てきそうなものですが、カーディニーの遺品は、使っていたカードやボールを始め、写真や手紙など、かなり広範囲にいろいろ出て来ていますが、未だにこの文書は出品されていません。

ここからは私の想像です。カーディニーが天海の舞台に文句をつけたのは本当だと思います。しかし、このことは、それだけ天海の演技が優れていたことに他なりません。そこで天海の奇術

がカーディニーの模倣であるかどうかを確かめるために SAM の会員を含む複数の人間が二人の舞台を観て回ったものと思われます。その結果、ニューヨークには天海が先に来て演じていたため、カーディニーの主張は退けられることとなり、この問題を収めるために、双方が妥協して、二人が同時にニューヨークで出演しているときには、天海がタバコを、カーディニーがボールを、演じない、という取り決めをしたのだと思います。その際、天海には、ボールの手品はあなたのほうが上手だったとたまたま誰かが言ったのです。明らかなのは、二人がひとつのステージに出て、判定者の前で競い合ったわけではないということです。

実に、こういうことはいわゆる自伝・自叙伝にはよくあることです。「奇術五十年」にある「明治・大正・昭和の3代にわたる天覧」も、松山光伸氏の考証によれば、明治天皇も大正天皇も石田天海の勘違いで、天海が直接奇術をご覧にいらしたのは昭和天皇だけとのことでした。ただし、書いた天海本人は、3代の天覧の栄に浴したと信じて書いています。このことは天海の生前には指摘する人もなく、天海は事実を知らず鬼籍に入ってしまった。

「奇術五十年」に記載されていることで疑問に思うことはまだまだたくさんあるのですが、キリがありませんし、そもそもそれは本旨ではありませんので、このあたりに止めます。

さて、長々と周辺のことを述べましたが、今回は、「天海のカード奇術」のパート2です。

#### 1. 天海の「客のカードを当てる法」

この作品の前に、「ケースの中のカード」というカード奇術が収録されているのですが、ダブルフェイス・カードと透明なカード・ケースが必要なので、割愛しました。

[現象]

マジシャンはシャッフルされたデッキの中から任意の10枚を選んで、1枚ずつ表向きで客に示し、その中から客に心の中で好きな1枚を覚えてもらいます。もちろん、客はこの間黙ったままです。客に10枚のカードのうち何枚目を覚えたか訊ねます。客が答えますが、さきほどの10枚の中にすでに客のカードはありません。客のカードは思いがけないところから出てきます。

[準備]

ありません。

[やり方]

- ①デッキを客によくシャッフルさせます。「これから、1枚ずつ合計10枚のトランプをお見せしますが、そのうちの1枚だけをひそかに心の中で覚えてください。声に出して言うてはいけません」と言いながら、デッキを表向きに左手に持って、右手で、表向きに1枚ずつテーブルの上に出して行きます。「1枚目、2枚目……」と言いながらカードを重ねて行きます。「自分の覚えたトランプが何枚目だったかも覚えておいてくださいね」と言います。10枚置いたら、客に「覚えましたか?」と確認します。説明の都合上、客が4枚目のハートのクィーンを覚えたとします。
- ②左手に持っている残りのデッキの一番上のカードを親指でプッシュオフして、やや横に出しておきます。右手で、テーブル上に重なっている10枚のカードを取り上げ、一旦左手のデッキに置いてから、やや揃えるような感じで再び取り上げますが、このとき、プッシュオフした1枚を10

枚の下に加えてしまいます。したがって右手で11枚取り上げるのですが、このとき同時に左手は手首を返して残りのデッキ全体を裏向きにしてテーブルの上に置きます(写真872)。これは、プッシュオフした1枚が右手に加わることによって、左手のデッキのボトムカードが変わるので、そのことを客に気づかれないようにするためです。



写真872

- ③右手に取り上げた10枚(実際は11枚)を裏向きにして左手に持ちます。客に、「何枚目を覚えましたか?」と訊ねます。カードの種類はまだ訊ねません。客が「4枚目」と答えますから、「わかりました」と言って、左手のカードを上から一枚ずつ声を出して数えながら裏向きでテーブルの上に置いて行きます。「1枚目、2枚目、3枚目」と重ねて置いて、4枚目に来たら、「これがあなたのカードですね」と言いながら、大きくアウトジョグして重ねます(写真873)。続いて、5枚目、6枚目と重ねて置いて行き、最後の10枚目は2枚ありますから、2枚重ねたまま、「10枚目」と言って、最後に載せます。

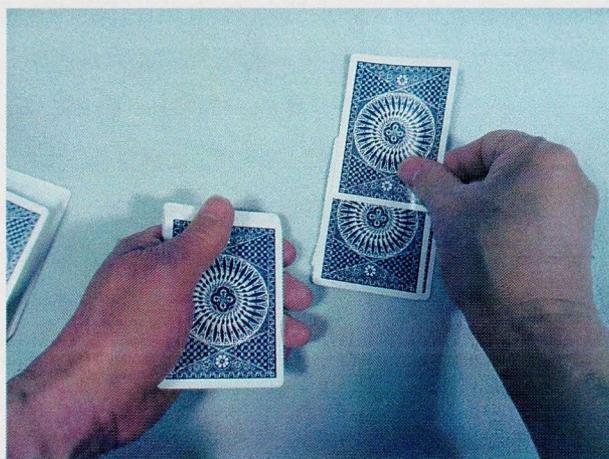


写真873

- ④テーブルに出した10枚(実際は11枚)を取り上げて、左手に裏向きで持ちます。4枚目のカードはアウトジョグしたままです。右手でアウトジョグしているカードから上のカードをすべて取り上げて、パケットの下に回します。これで、実際に客の覚えたハートのクィーンはパケットの

ボトムに来ます。

- ⑤アウトジョッグしているカードを揃えながら、ポケットのボトムカード(客の覚えたカード)をギャンブラーズ・コップでパームします。同時に右手でポケット全体を表向きにしてテーブル上にリボン・スプレッドします。客に、「覚えたカードは何でしたか？」と訊ねますが、当然にもテーブル上の表向きの10枚の中にはありません。
- ⑥「おかしいですね？」と言いながら、左手にギャンブラーズ・コップしている客のカードをマジシャンの膝の上にラッピングしてしまいます。そして、テーブル上の10枚の中に客のカードがないことを確認したら、膝の上の客のカードを拾い上げて、適当なところから出します。
- ⑦以上が、大矢さんの「天海の講習ノート」に書いてある内容です。しかも、ノートの図では、左手にギャンブラーズ・コップしている客のカードは表向きですが、実際は裏向きです。このまま、一旦客のカードをラッピングして後で適当なところから出すのだ、と言われても困る人が多いと思われれます。天海はどのようにして出していたのでしょうか？膝の上からカードを拾ってもう一度パームして上着のポケットから出すのは悪くはありませんが危険です。幸い、これはテーブルの前で演じていますので、ここは、スライディーニのインプ・パスの要領で、左手の客のカードをテーブルの端で、一旦、右手の親指と人差指に渡し、左手をフリーにしてから、左手で上着の前を開けるなりして、右手であたかも上着の内ポケットから客のカードを出して来るのが良いと思います。
- ⑧「スライディーニのインプ・パスの要領で」と書きましたが、コインをやらない人には何のことかわからないでしょうから、簡単に解説します。本来はコインの技法ですので、カードに応用するのはちょっと無理がありますが、私はけっこう多用しています。この場合、左手にギャンブラーズ・コップしているカードをテーブルの端に置いた右手の親指と人差指だけで挟んで右手に渡してしまうことです(写真874)。もちろん客からは見えません。客はマジシャンの左手を疑っていますから、その左手を空であることを何気なく見せながら上着の前を開け、右手はカードを持ったまま、下から上着の内側に入れて、あたかも上着の内ポケットから出したように見せるのです。ちなみに、私は、コインのインプ・パスをスライディーニ本人から習いました。



写真874

## 2. 天海の「アルマーと天海」

「アルマー」というのは何のことだかわかりません。おそらく人の名前で天海と同時代に生きたマジシャンだと思われます。大矢さんは、現象から、これに「水と油」という題名を付けておられますが、天海自身が、このカード奇術のタイトルは、「アルマーと天海」だと言っているのですから、ここは、元の題にしておきます。

[現象] 4枚の5のカードと4枚のクイーンを示して揃えますが、いつの間にか、5とクイーンは交互になっています。

[準備]

ありません。

[やり方]

2段からなっています。過程が異なるだけで、現象は同じです。

第1段: 5とQの点検

- ①シャッフルしたデッキから4枚の5と4枚のQとを取り出します。スートの順序は問いません。4枚の5を表向きにしてそろえ、その上に表向きの4枚のQを載せます。8枚を広げてよく客に見せます(写真875)。

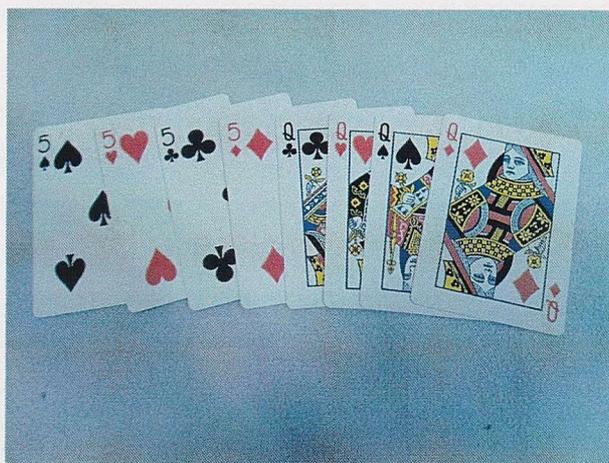


写真875

- ②この8枚のパケットを裏向きにして、右手にビドル・ポジションに持ちます。右手から左手に1枚ずつ取って行きますが、声に出して、「5、5、5、5、クイーン、クイーン、クイーン、クイーン」のように言います。まず、右手から1枚ずつ左手に2枚取ります。次に3枚目を左手に取る時に、この下に左小指でブレイクを作ります。ブレイクはそのまま、この上に4枚目を取ります。5枚目を取る時に、左手のブレイクから上の2枚を右手のカードの下に引いて取ってしましますが、いま右手の下に取った2枚のカードの上には右親指でブレイクを保持しておきます。次に6枚目をとりますが、同時に右手親指のブレイクから下の2枚を、この6枚目のカードの下に左手に取ってしまいます。そして、そのまま、右手から7枚目、8枚目と左手に一枚ずつ取ります。仮に、ここで、左手に取り終わった8枚を表向きにして点検すると、Q,Q,Q,5、5、Q,5、5の順になっているはず(写真876)。

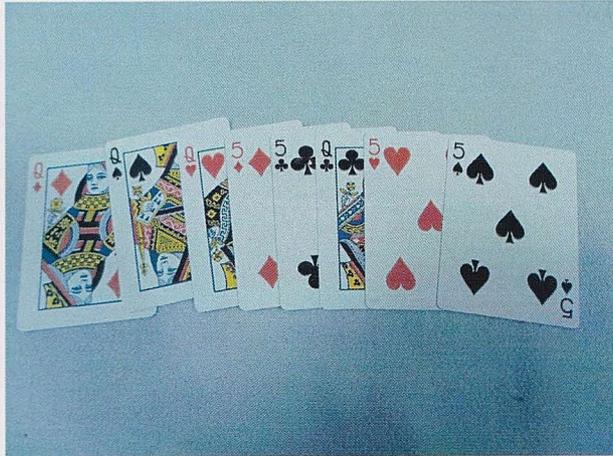


写真876

- ③裏向きのまま、まず、上から1枚ずつテーブルの上に確認するように出して重ねて行きます。「4枚の5と4枚のクイーンです」と言います。カードの順序が逆になります。そして、この8枚を裏向きのまま再び、右手にビドル・ポジションに持ちます。このときのポケットの状態は、上から、5、5、Q、5、5、Q、Q、Q です。右手から1枚を左手に取り、2枚目を取るときに、この2枚目の下に左小指でブレイクを作ります。3枚目を取るとき、ブレイクから上の一枚を右手のカードの下に取ります。4枚目のカードはそのまま左手に取ります。いま左手には3枚しかありませんが、客は4枚だと思っていますので、「4枚の5は、ここへ置きます」と言って、左手の3枚を重ねたままテーブル上に裏向きで置きます。
- ④右手のカードから左手へ、5枚目、6枚目を取ります。7枚目と言いながら、7枚目を取るときに、左手の2枚を右手のカードの下に取ってしまいます。左手は1枚だけになります。そして、右手のカードをすべて、8枚目と言って、左手のカードの上に乗せます。「これが4枚のクイーンです」と言って、すでにテーブル上に置いてあるカードの上に裏向きで載せます。
- ⑤この裏向きの8枚のカードを左手に持って、右手でカードの右上隅を持って上から1枚ずつ表向きにして行くと、上から順に、Q、5、Q、5、Q、5、Q、5となっていて客は驚きます(写真877)。



写真877

第2段:再び5とQとを分ける

- ⑥いま交互になった5とQの8枚を左手に表向きに持って、右手で、5をダウンジョッグ、Qをアウトジョッグするようにして行きます(写真878)。「5とQとを分けます」と言っておきます。

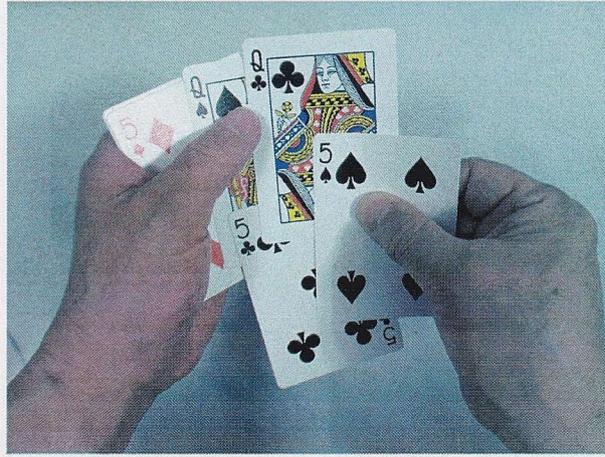


写真878

- ⑦最後のQを上に出トジョッグするときに、すぐ上にある5も一緒に上に挙げて上から3枚目のQの下に揃えてしまいます(写真879)。



写真879

- ⑧ただちにこのままパケット全体を裏向きにひっくり返し、裏向きで下にインジョッグされている5(3枚しかない)を回転するように横に抜いて左手のパケットに下に重ねます。客からは、Qと5を分離して、5の4枚をQの下に入れたとしか見えません。
- ⑨8枚のカードを裏向きでファンに拵げ、上の4枚を「クイーンをここへ置きます」と言って、そのままの順序でファンに開いたままテーブル上に裏向きで置きます。次いで、残った4枚を上から順序を変えないで左手に2枚、右手に2枚ずつ持ちますが、このとき、左手の2枚のうち、上側のカードはやや手前に引いて、かつ左側に少しはみ出るような形にします(写真880)。これは、この上側のカードだけがクイーンだからです。この状態で、両方の手を返して、それぞれ2枚ずつ4枚のカードを見せると、客からは、あたかも4枚の5であるように見えます(写真881)。



写真880



写真881

- ⑩左手の2枚の上に右手の2枚を載せ、テーブルの上に置いてある4枚を揃えて左手のカードの上に裏向きで載せます。そうしたら、上から順に、カードの右上隅を持って表向きにしてテーブル上に置いて行きます。Q,5,Q と置いたら、4枚目はセカンド・ディールします。5です。以下、そのまま Q,5,Q、5と置きます。再び、Q と5が交互になっているので客はびっくりします。

[コメント]

この解説も判読に相当苦勞しました。「講習ノート」の図は、基本的に上手に描いてあるのですが、メモの文章と図の手の形が違っていたり、図では裏になっているカードが実際は表だったり、今回の「アルマーと天海」で言えば、5とQで演じていた手順が、いつの間にか、Qとエースになっていて、図もエースになっているので、一瞬、戸惑います。それと、どういうわけか、図がマジシャン側から見たものと客側から見たものが混在していて、まさに、メモを書いているご本人の備忘録なのだ、と思わされます。大矢さんが、この「アルマーと天海」というカード奇術を現象面から捉えて「水と油」と改題されたのはまさに炯眼で、第1段のビドル・ムーブのやり方はともかく、第2段のインとアウトにジョグするやり方は、「オイル・アンド・ウォーター」の手順の中に組み入れるのはなかなか有用な方法で、赤と黒のスポット・カードで行うとかなり鮮やかに見えます。

### 3. 天海の「なくなったクイーン」

[現象]4枚あったクイーンがなくなって、すべてエースに変わっています。

[準備とやり方]

このカード奇術も途中で唾液を付けることになっていましたので、その点のハンドリングは、唾液を付けなくてもいいように変えてあります。それだと、石田天海が怒るのではないかと思われるかもしれませんが、私が実演した限りでは、十分に実用的で、おそらく石田天海が不満に思うようなことはないと思います。準備はありません。

- ①デッキを客によくシャッフルしてもらいます。デッキをマジシャンのほうに表を向けて、4枚のエースと1枚のQを裏向きで抜き出します。Qが中央です(写真882)。客には、何のカードを何枚出したかは言いません。

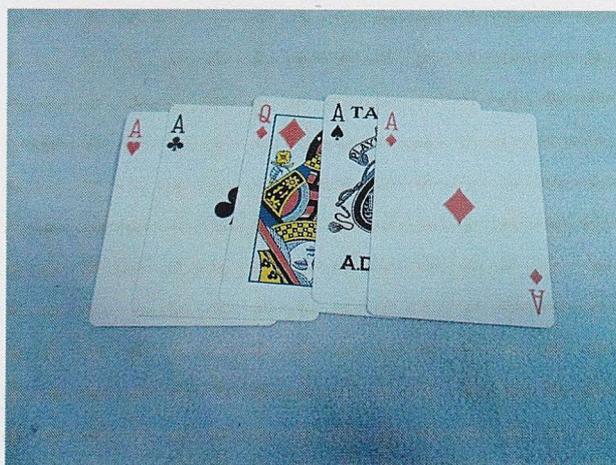


写真882

- ②パケットを裏向きで両手に持って拵げますが、最後の2枚はあたかも1枚のようにして保持し、客には4枚のパケットであることを示します。
- ③このパケットを再び閉じますが、このとき、上から3枚目のカード(Q)の下にブレイクを作り、左小指で保持しておきます。ブレイクから上の3枚をあたかも1枚のようにして表向きにひっくり返してQを見せ、再び裏向きにしてから、トップ・カード(A)だけを裏向きのままテーブル上に出します。
- ④次は、まず、左手に持っているパケットの上の3枚を左親指で右へプッシュオフし、さらに、いまプッシュオフした3枚を下から左人差指と左中指とで固定しながら、さらに、上の2枚だけを右へプッシュオフします(写真883)。そして、最終的にプッシュオフした2枚をひっくり返してQであることを見せ、再び裏向きにしてから、トップ・カード(A)だけを裏向きでテーブル上に出して、さきほどのカードとオーバーラップするように重ねて置きます。
- ⑤この状態で、左手には3枚のカードが残っていますが、客は2枚だと思っています。左手のトップ・カードをそのままひっくり返して表向きにし、Qであることを見せたら、再び裏向きにしてから、上から2枚をダブル・リフトして、2枚をそのままテーブル上の裏向きのカードに重ねて出します(写真884)。

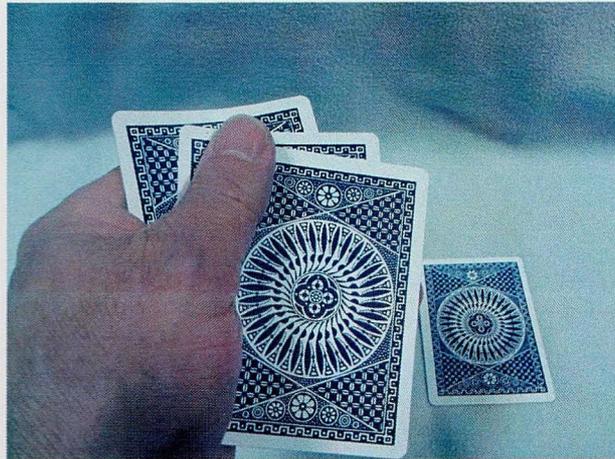


写真883

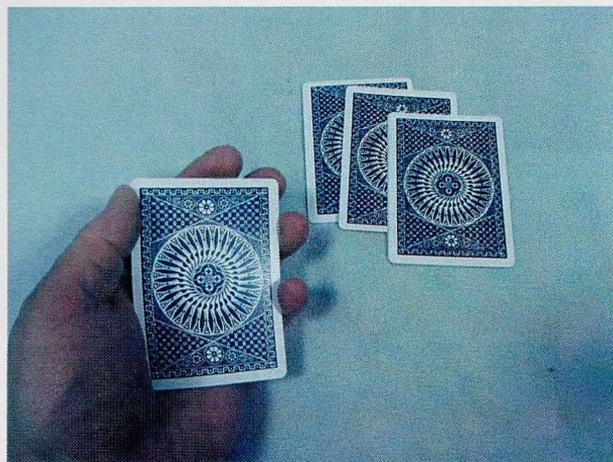


写真884

- ⑥左手の最後のカードを右手で取り上げ、マジシャンだけが表を見て「このクイーンを左手に通すと・・・」と言って、左手を拳にして中を通します。「・・・エースに変わります」と言いながら、このカードがエースであることを見せます。これはクイーンであることを客に見せてはいませんが、いわゆるミスコールで客にクイーンと思わせるのです。ただし、天海の原案では、このような小ざかしい演出はありません。
- ⑦エースになった最後のカードでテーブル上の3枚(実際は4枚)のカードをタップして、最後のカードを上に乗せ、4枚(5枚)のカードをすべて取り上げます。ポケット全体を左手の上に表向きにするとエースが見えていますから客は驚きます。このまま、バックルカウントして、確かに4枚のエースに変化していることを見せます。

[コメント]

どこで唾液を使うのかマニアの方ならおわかりだと思います。3枚目のクイーンを見せるときにクイーンの表側に唾液を付けるのです。そのように行くと、最後の4枚のエースの見せ方が、1枚ずつ表向きでテーブルに置けることになるので、鮮やかになることは間違いありません。その演出を取りたい方は、唾液の代わりにマジシャンズ・ワックス等で代用されると良いと思います。

#### 4. 天海の「3枚同じカード」

[現象] 同じ数字のカードをバラバラに離しますが、何度やってもくっついて現れます。

[準備]

ありません。

[やり方]

- ① デックを客によくシャッフルしてもらいます。客からデッキを受け取ったら、表をマジシャンに向けてファンに拡げます。このとき、トップから2枚目のカードを見ます。この場合は、仮に◇2であったとします(写真885)。



写真885

- ② 「これから3枚同じトランプを使って手品を見せます」と言いながら、いま見た2のカードと同じ2の他のスートのカード、すなわち、♠2、♥2、♣2の3枚を探してテーブルの上に表向きで重ねて出します(写真886)。

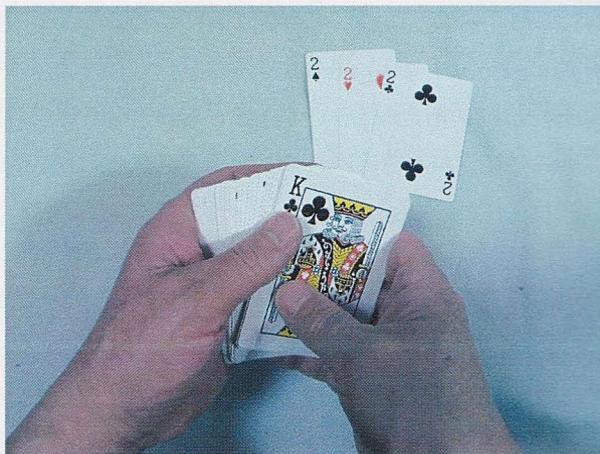


写真886

- ③ ただちに、この3枚を裏向きにして、左手のデッキの上に乗せ、上から順に、1枚ずつ左右に3枚ずつの山ができるように配ります(写真887)。左が先で、次いで右と配ります。「こうすると、さきほどの2が左右に分かれます」と言います。



写真887

- ④右側の山のトップ・カードを取って、この山を掬い、デッキの上に載せます。「ところが・・・」と言いながら、左の山の3枚を表向きにすると、3枚の2です。「3枚の2がくっついて現れます」と言って、3枚が重なったまま表を軽く見せたら、ただちに裏向きにして、デッキの上に戻します。
- ⑤再び、デッキのトップから1枚ずつ、左右左右にテーブル上に6枚のカードを配りますが、今度は、6枚目のカードは右側の山に置いてしまわないで、そのまま右側に置いてある2枚のカードを軽くタップしただけでデッキの上に戻し、さらに、このデッキの上に右側の2枚のカードを取り上げて載せます。
- ⑥そこで左側の山を表向きにすると、3枚の2が現れます。「いつも3枚の2がくっついているのです」と言いながら、3枚の2が重なるようにして軽く表を見せたら、ただちに裏返してデッキの上に戻します。
- ⑦もう一度行ないます。デッキから左右に1枚ずつ、テーブル上に3枚ずつの山になるようにカードを配ります。今度は、右側の3枚の山をそのまま取り上げてデッキの上に戻します。そして、残った左側の山を表向きにすると、3枚の2です(写真888)。「どうも何度やっても2はくっついて来るようです」と言うておわります。



写真888

[コメント]

この手品は、2よりも絵札や8とか9のようなスポット・カードのほうが、客が違いに気づかなくていいと思われるかもしれませんが、解説にある通り、最初に客にデッキをシャッフルさせてからそのままの状態で行いますから、そのときにトップから2枚目にあつたカードに左右されるのです。そういうことに拘泥せず、デッキの中からスポット・カードを選びながら、それに合わせてトップから2枚目をセットすればいいのではないかとも思われる方もいらっしゃると思いますが、それでは、客に自由にデッキをシャッフルさせた意味が損なわれます。石田天海のこの時代というか、実はいまでも、カード奇術を始める前に、デッキを客に渡してシャッフルさせることはきわめて重要であるとするマジシャンは欧米にも多いのです。デッキがセットしてあると、マジシャンは、いわば何でもできてしまうので、そういう意味ではフェアではありません。したがって、天海のカード奇術は、どれも最初に客にデッキをシャッフルさせることが多いのです。そうでない場合は、必ずフォールス・シャッフルしてから行います。Juan Tamarizも、あのフルデッキをセットする"mnemonica"で、しつこいくらいにフォールス・シャッフルに言及しています。したがって、カード奇術を演じる際には、まずデッキを客にシャッフルさせるかマジシャンが自分でシャッフルしてみせるのが原則です。

5. Vol.5→Vol.6

"aficionado"の規定の紙数が尽きました。「天海の講習ノート」はこれでちょうど半分です。判読と解説には相当の忍耐と根気が必要ですから、時間とエネルギーがないと続きません。幸か不幸か、"aficionado"Vol.5は本号で終了しますので、一旦、休憩して、「天海の講習ノート」のストレスから解放されて、Vol.6のいくつかの号で、まったく別のカード・マジックを2、3取り上げてから、再び「天海の講習ノート」に戻ろうと思っています。しかし、だからといって、読者のみなさんがVol.6を継続して購読する義務のないことは言うまでもありません。

"aficionado"Vol.5はこの号で終了です。長い間のご購読ありがとうございました。10冊出すのに5年以上費やしています。それでも同封のフライヤーにあるように、懲りずにVol.6を刊行しようと思っているのは、読者のみなさんからの励ましによるところ大です。次号も定期購読の価格は据え置き、1年間10冊で20,000円としますが、いままで「送料込み」としておりましたところ、現在ご存じのようにレター・パック・ライト(370円)で送っていますので、この分の送料だけのご負担をお願いいたします。したがって、合計の定期購読料は、23,700円となります。定期購読お申込みの詳細は同封のフライヤーをご覧ください。

Vol.5のご購読、誠にありがとうございました。

今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

これは、aficionadoのVol.5-No.10です。

郵便の送付先: 〒145-0061 東京都大田区石川町2-33-1-904 マスカレイド

Eメール・アドレス: [masqpart4@aol.com](mailto:masqpart4@aol.com)

これは、限定100部のうちの08/100です。

(2021年1月)